

伝統を大切にし、人を育て、研究することで「木を創造する」

ダイワ産業株式会社 奈良県高市郡高取町

ダイワ産業株式会社の物づくりは、「伝統を大切にし、人を育て、研究する」ことから始まる。同社では、培った伝統を重んじながら、常に新しい技術開発に積極的に取り組むことで、人々に癒しと満足感を与える商品を提供し、地域社会に貢献している。

会社概要



会社名：ダイワ産業株式会社
所在地：奈良県高市郡高取町市尾 897-1
電話：0744-52-2926
FAX：0744-52-4487
設立：昭和45年9月
代表者：代表取締役 中西 正幸
資本金：1,000万円
従業員：18名
事業：国産材による家庭用品等の製造販売

URL：<http://www.daiwa70.com/index.html>



同社工場内部

伝統とテクノロジーの裏打ち

良質な木材が取れ、林業・木工業が盛んな奈良県南部は、古くから地場産業として様々な木製品が作られてきた。そういった環境の中、ダイワ産業株式会社は、古来引き継がれてきた職人による伝統の技にも裏打ちされ、地域とともに発展してきた。しかし、良質な木材と伝統の技に頼るだけでなく、常に新しい技術を研究開発していくこ

とも大事と同社では考えている。設立は昭和45年9月。元々は、木製の配置薬を入れる箱を製造していたが、時代の流れから薬箱の素材は値段が安いプラスチック製に替わっていった。

現在の企業基盤を築いたのが35年前に始めた木製家庭用品のまな板や飯台の製造である。大手スーパーや生協、通販などへの販路が広がり、同社の主力商品となり、成長に大きく貢献したが、安価な外国材による商品や輸入品の攻勢など流通の大きな変動を受けることになった。これを打破するため、3代目の現社長は、日本人になじみの深いひのき、杉等の国産材の良さを追求し、国産材にこだわり、この特性を生かした商品開発に取り組んだ。「安心素材、安全加工、癒し、和み、清潔」を開発のコンセプトとし、日本人の感性に合う商品に、新しい技術による付加価値を加えて、現在に受け入れられる商品として市場に供給を始めた。

ここで商品開発の大きな力となったのが、産学官連携による共同開発である。奈良女子大学、奈良県森林技術センターの指導、協力を得、国産材の特性を生かす研究開発を行った。ひのき、杉に含まれる成分がもたらす効果の研究、木材につきやすい黒かびを防ぐ研究、安全な塗料や接着剤の研究開発に加え、ハイテク接着技術や切削技術の指導を受けるなどにより、新商品を次々と開発してきた。こうして作られた同社の商品は、ほとんどが他社に真似のできない唯一無二の商品となった。

以下、研究開発によりもたらされた商品を幾つか紹介する。

<切削技術開発による寝具材料>

- ①柔らかくてもつぶれないひのき枕材：くるくるとカールしたカールチップは独自の切削技術によって作られている。つぶれにくいので枕の高さが変わらず、頭部へのあたりが良く、ひのき枕の素材として数十トンの出荷実績をもつ。
- ②羽毛のように軽いふとん材：新商品である。スパイラル状のチップは長さ3cm、厚さ50ミクロンの極薄に切削され、羽毛と均一に混ぜり合う。ひのきを羽毛に混ぜ合わせた「ふとん」は

暖かく、汗の吸収が良いうえ、汗、体臭のにおい成分を分解する。この極薄チップの切削技術も独自のものである。



ひのきスパイラルチップ (左) とひのきカールチップ (右)

<食器洗い乾燥機対応のひのきまな板>

ハイテク接着技術と安全で強靱なウレタン塗料の開発で作られた商品である。数年前に木製として食器洗い乾燥機に対応できるまな板を日本で最初に開発し、好評を得ている。

<ひのき消臭剤>

ひのき成分の消臭効果を研究した結果生まれた商品。業務用として、ホテル・旅館・スーパー銭湯に販売している。天然成分で安全な上、強力な消臭効果があるので市販の消臭剤では太刀打ちできないような臭いにも効果を発揮する。かに料理旅館で特にもてはやされている。



ひのき消臭剤

<黒ずみにくい大浴場用のひのき風呂いす、湯桶>

全国の旅館、ホテル、スーパー銭湯、ゴルフ場に提供している。木製品につきやすい黒かびを防ぐ塗料の研究により、全国の施設に信頼を得、数々の納入実績がある。

出土品保管箱の製作に取り組む

バリエーションのある同社のユーザー先を象徴

する事例がある。

遺跡の発掘調査で見つかった土器や瓦などの出土品は一般的にプラスチック製の箱に保管されている。プラスチックは軽くて扱いやすいというメリットがあるが、反面、熱に弱いというデメリットもある。県立橿原考古学研究所では、万が一保管場所が火事になっても文化財などの大切な出土品が被害を受けないよう、保管箱の見直しを行い、結果、プラスチックより火や熱に強い木製の箱が選ばれた。この話が同社に持ち込まれ、現在、木箱の実用性を試す取り組みが進められている。箱の材料には十津川産の杉の間伐材が使われており、中西社長は、「奈良県林業の活性化に繋がると期待しており、少なくとも500年は利用できるものを作りたい」と意気込みを語っている。

これからの展開

新しい取り組みとして住宅の壁紙や障子、建具などの内装材としての用途も視野に入れている。スパイラルチップの独特の形状によって、質感・立体感ができるため、チップを埋め込んだ内装材は今までにない独特の風合いを醸し出すのだという。



独特の風合いを醸し出す内装材

すでに試作品はできているものの、「よりいい物」を求める社長の目は厳しく、まだまだ改良の余地があるというが、将来的にはこの内装材が同社の主力商品のひとつになると見込んでいる。

中西社長はこれからも国産材の特性を最大限に生かした付加価値の高い商品作りに専念し、技術開発を続けることで「木を創造」し続けていくことであろう。

(丸尾尚史、鶴山吉永)